

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO.13 ヒマラヤの青いケシの花 ～ブータンレポート第5信～



この程度の山では名前なし。いたるところに
経文がはためく（ティンブー郊外）



都市化が進み車があふれる一方、牛の群れで
交通渋滞

ブータンを訪問する日本人は年間約 4000 人だそうで、意外と多い気もするが、海外渡航者が年間 1712 万人に上ることとを考えると、やはり訪問者は少ない。私の周辺でも、ブータン訪問の話題には反応が大きい。珍しさと「幸せの国」への誤解だろう。衛生・環境分野を調べてみると、ブータンで指導をしたという関西在住の技術者の情報をネットで検索する事ができ、これまで関与がゼロではなかったことが分かる。社会資本や法制度が極めて乏しい中での指導は、さぞかし苦勞が多かったことだろう。

日水コンの竹村雅之氏（前水道本部長）には古くから懇意にさせていただいているが、彼はトレッキングが趣味で、と実は「ブータン・ネタ」で初めて知ったことだが、ヒマラヤの山麓を歩いたという話をきいた。山麓と言っても、4～5000m級の高山だろう。青い色の芥子の花を探しに行った、と言うのだから、飲み食いのことばかり考えている当方と違って、品格が違う。そういうことに価値を見だし、楽しめる感覚を持っていることに対して、何とも表現し難い印象を持つ。羨望ではなく、もちろん、軽蔑ではあり得ず、要は、不思議な世界をのぞき見るような気持ち、とでも言うか。そういう当方も、1960 年代後半の一般の人には騒音にしか聞こえないと思われる前衛 JAZZ が心底から心地よいので、まさしく人それぞれの好みというものである。

竹村氏によると、トレッキングの最中、担架代わりに戸板に乗せられて運ばれる光景に 2 度、遭遇したらしい。1 度は息も絶え絶え、2 度目は明らかに骸と化していたそうだ。原因は中国のバイヤーに冬虫夏草を高値で買い取ってもらえるため、さらに高地に登り、高山病で命を落とすらしい。

ブータンの山では 5000m 程度までの山には名前が付いていない。6000m を越えなければ山とは見なされないということか。地理情報は移動するために必要であり、山は目標として活用されるものではないのか？ と言うことは、移動しなかった、あるいは移動する必要がなかったのだろうか。しかし、峠には名前がついているのだから、移動してはいたのだろう。歴史を辿っても、首都を移すといったこともあったらしい。

また、山は神聖なものだから、山頂に登ることを許されていない。

一言でブータンといっても、九州ほどの大きさはあるわけで、私が訪問したのは国際空港があるパロ、首都ティンブー、古都プナカの 3 カ所に過ぎない。つまり、西地区のほんの一部である。東西南北で気候も風土もかなり違うようで、西地区は 3 つの大きな都市（というより町）があり、他の地域に比べると、近代化の影響を受けているようである。資料を見ると、西地区の 3 都市以外は昔のままの姿を残しているらしく、北はヒマラヤの麓、南はインドの影響が濃いらしい。東地区は山と山村といったところか。現地ガイドは東ブータンの出身で、実家へ帰るには、バスで何時間も要する上、さらにバス停（？）から 9 時間歩かねばならないと言っていた。山の中を 9 時間歩くと言うことは想像できないことだ。

日本から同行したツアーコンダクターは、7 年ぶり 2 度目の訪問だと言ったが、首都ティンブーの変貌に驚いていた。一挙に都市化が進行し、田舎町の景色が一変しているとのことだった。

日本では人口減少により、町や村が消滅する「限界集落」予測（高知大学教授（当時）・大野晃）が衝撃をもって受け止められた。これについて真柄泰基氏（給水工事技術振興財団理事長）は、データを下に、「現在ある町や村が忽然と消えてしまうと言うように誤解していないか。総人口は減少しても、町や村（給水区域内で人が住んでいる町や村）が消滅する数は意外と少ない」ことを指摘している。だからこそ、水インフラのダウンサイジングは難しいということを認識すべきだ、と言うわけだ。

私が水道業界紙駆け出しの頃、我が国最高の水道技術者群の 1 人である川北和徳氏（元東京都水道局長）が雑談の中で、水道が整備される事によって、「都市に住めるようになったしね」と語られた。さりげない一言がひどく印象深かった。その後、『都市にいつまで住めるか』（末石富太郎著）により、都市と衛生インフラを強く意識するにいたった。初めて触れたその名著により「都市に住むしかない」と理解した。

今や途上国こそ都市で暮らすしかない時代に入りつつあるか。